大滝沢遡行報告

【遡行日】27 年 8 月 2 日

【遡行場所】大滝沢

【コース】滑川温泉下～大滝沢入渓～co1300 付近枝沢～大滝沢右岸登山道下山～滑川温泉

【参加者】ＣＬ辻本、岸野、山内、加藤、古関、明官、大野、板橋

【天　候】晴れ

新入会員板橋（7 月入会・沢 2 回目）がレポートします。

8 月 1 日（土）20 時、千葉駅北口集合。続々と集まってくる。千葉の夜は暑い。駅前のコンビニに吸い込まれ思い思いの飲み物を買っていざ出発。

峠駅には午前 1 時頃到着。暗い中で手分けし手際よくテントを張っていく。もたもたしている私が持っているテントの梁を加藤さんがすっと嵌めてくれた。あっという間に寝床が出来上がり、思い思いのつまみが手早く並べられ、宴会開始。密着したテントの中で揺れている灯に、私の心はワクワク。夜遅いにも関わらず皆の顔に疲れはない。1：30 頃には明日に備え、就寝。辻本さんのアドバイス通りシェラフカバーでとっても快適、暑くもなく、むしろ涼しい位で、山形の山奥の夜は更けていく。

5：00 誰かのアラームが鳴り、起床。

山男・山女の方たちの身支度の速さってすごいのね、と寝ぼけ眼で思う。手早く撤収し朝食を摂り、いよいよ出発だ。

橋の上でパチリ

6：40 滑川大橋到着。
車を止める場所は 2 台分バッチリある。私たちで駐車場はいっぱいだ。身支度を整え、いよいよ出発！
私を含め初心者数名、ハーネスの付け方でまず戸惑う（初めてつけるわけでは無いにも関わらず）いったいどこに足を通すの？？先輩方の助けをかりてそんなこんなでなんとか完了。
下りるとすぐに赤銅色の美しいナメが続く。朝早い時間だがすでに日も高く、赤いナメに透明な水がキラキラしている。見上げると山深い緑と雲一つない空。
鉱山が上流にあるそうで、魚はいなく水は澄み、苔も生えず、岩の上も滑らない。快適に歩みを進める。
　ナメ滝と丸い釜。そそられる感じの大きさと深さ。不思議な青さ。水の圧力のせいだろうか、思いのほか釜は深い（そういうものなのでしょうか？）ついつい飛び込みたくなる。じっと見てると「渦巻いてるところは巻き込まれてあがってこれないからね（だから入っちゃ駄目だよ）」と辻本さんからアドバイス。なんでもかんでも入ってよいわけじゃないらしい、と一つ学習する。

Ｆ１を登る

大滝沢入渓ポイント

大滝沢Ｆ１

カモシカ沢というらしい

歩みを進めると岩が良い感じに抉れた天然のウォータースライダーが現れる！しかし結構な水勢である。お尻が痛くないだろうか？とやや躊躇っているとパッパと身軽な格好になった辻本さんが滑る！ひょー！見ている方も興奮してくる。後はわらわらと全員が続いた。ちっとも痛くない。なんというのだろうか、絶妙なスピードと角度でザブンと釜に落ち込んでいく。「あ、写真うまく撮れていなかったからもう１回」テイク２！笑い声が谷に響く。

涼 味 満 喫！　気持ちイ～イ

緑の中をぐんぐん進む。やがて圧巻の滝が現れた。120mの滑川大滝は壮観の一言に尽きる。明るい青空に白い滝、赤い岩肌が本当に美しい。滝を眺めながら一休み。思い思いに写真撮影。

みんなで滝に打たれた。冷たい！オ～！

滝の横をまいて登攀していく。体感としては、直角に上っているのではないか？！と思うくらいであった。草を掴み、枝を掴み登っていく。私は自分の荷物だけだが濡れたザイルを背負ってくれた岸野さんはさぞ重かっただろうと思う。横に行く時にはザイルを張ってくれる。カラビナの付け替え方をレクチャーしてもらい、一人ずつ慎重に行く。ついうっかり自分が全部離れてしまうはずし方をしようとすると先輩方からそれは駄目、と声がとぶ。ご心配をおかけしました。おかげで無事に渡りきる。滑川大滝の上に来ると登った者にしか見られない美しさ。まさに絶景である。赤銅色のナメが足元に

あり、水は下に吸い込まれて遥か地上付近で虹を作っている。

　ちょっと深い釜では、気付くと黄色いライフジャケットを身に着けた加藤さんがすいすいと泳いでいる。

ナメ滝では、「足をべたっとつけろ」「縦に足をつけるんだ」という先輩方のアドバイスがあるものの、１回怖いと思うと踵が浮いて腰が引けて、ずるずる滑ってしまう。先輩方を見ていると足の付け方もさることながら姿勢が綺麗、重心を高く保ってすいすい登ってくる。「見ていると簡単そうなんだけどね」と思う。先輩の後をなるべく同じように、と思って登るとちょっとできるような気もする。

大滝上は明るいナメ

加藤さんが泳いだ釜

ナメ滝を登る

滝を直登するルートを選んだ辻本さん。「ここを行くのか…」と心の声だけでなく思わず口からもこぼれる。いったいこの直角に見える滝をどうやって登るんだ？登るだけじゃなく水しぶきの中を行くことが本能的に怖い、とも思う。すいっと綺麗に登る古関さん。どうやら滝の中に足場があるらしい。先輩方は見えない水の中にある足場をどうやってみつけているんだろう。「来いっ」（マジか…その２）おっかなびっくり登りだすも滝の水流を浴びながら、次の足場が見つからない。「木のてっぺんに右足！」とアドバイスの声は聞こえているも、「そこに足を乗せるには左足と両手もかけて身体をひきあげなければないではないか、そのぶわっと浮く瞬間が怖いんだよ、そのまま落ちそうで」と思う。しばし立ち往生するも勇気を出すしかないのだ、と自分に言い聞かせ、えいっと足を乗せてみると、おや？そこから先はルートがあるではないか！ここを登れたことがこの日一番、嬉しかった板橋でした。

滝を登れた！

ラストは加藤さん

● この滝を登った ●

ナメとナメ滝と釜と超えて、少々（いや正直に言うと大分）お腹がすいてきたところでやや開けたナメに到着。「ここでそうめんにしよう」の声。待ってました～。

11：40 素麺タイム。澄んだ沢の水を汲んで、コッヘルで水を沸かす。待ちきれない思い。網のバッグで素麺を水にさらす。熱い鍋から素麺を移す人と、網で待ち構える人とのチームワークが問われる。網係は火傷をしないよう必死だ。思わず笑いがこぼれるが、そこは勿論チームワーク抜群に素麺が出来上がる。薬味のミョウガとネギとキュウリがおいしいこと！濃い目のツユと沢で冷やした素麺、絶妙な風味の薬味が汗をかいた体に染み渡る。一人 3 束分あったそうだが、あっという間に無くなる。大満足である。このまましばらく昼寝がしたい（心の声）

さて、午後の出発。大岩を越えていく。身体が重い…。お腹一杯食べたためか。そろそろ板橋は気付く。前半戦で無駄に水につかりすぎて体力を消耗していたことを…。こういうことか、と実感する。

どこまでも渓は美しい（でも疲れた）

大岩を越えて

あの美しかった赤いナメともそろそろお別れ。その後は延々と続く大岩越えは私には大分きつかった。足が上がらなくなってきて膝でよじ登る（←駄目な例）

ふと気づくと硫黄の匂いがする。ゴールが近いらしい。最後の岩は何とも言えない色合いだった。硫黄の影響なのだろうか、紫・緑・黄色っぽい色…とカラフルながら荘厳な岩肌であった。

枝沢を登り、登山道についたのは 14：20 頃。ここで沢とお別れし、登山靴に履き替える。ひたすら下って滑川温泉に 16：00 少し前に到着。もう私は動けません。車を取りにいってくださった辻本さん、大野さんありがとうございます。ここで硫黄の恵みたっぷりの秘湯につかり元気回復。一路千葉を目指したのでした。今も夢に出てくる美しい赤いナメ、鮮烈な緑の森、キラキラ輝く透明な水しぶきに山形の青空、初心者の私が沢登りを存分に楽しめたのは知識も技術も豊富で常に見守ってさりげなく助けてくれた先輩方がいたからです。そしてちょっとした困難も楽しんでしまう素敵な度量。皆様ありがとうございました！